

別府の史的 연구に就て

清原貞雄

偶々別府博覧会が開催せられて別府に対する関心が高まつて居る際に當つて、大分県地方史学会に於ては別府の歴史を中心のテーマとした特別号を出すとの事で私にも執筆を求められたが私は別府に就て何も特別の知識を有つて居ないので、簡単な巻頭言で免除して頂く事とした。

私は別府の歴史に就ては全然無智であるが概観的に少し考えた所で、そこには色々の面白いテーマが見出される様に思われる。それは別府と云うものが他の都市とは全然違つた性格を有する特別のものであるからである。

云うまでもなく別府は湯治場として発足したものである。湯治場としての別府は相当古いものであるが、それが現在の如く歓楽境として発展を始めたのは何時頃如何なる理由に依つたものであろうか。温泉場であると言ふ事それ自身が歓楽境化する性格を本来的に有して居る事も考えられるが、それが必然的のものでない事はヨーロッパの温泉場が必ずしも

歓楽境化せず、湯治場としての性格を保持して居る所が多い事に依つても考えられ、我が国に於ても山間僻地に於ては今日でも純然たる湯治場として残つて居る所が少なくない事に依つてもわかる。故にそれには他の理由が考えられねばならぬ。才一に多数の浴客が集つて町が賑やかになると云う事である。賑やかになるに従つて接客の設備が発達して歓楽場化し、歓楽場化した事が更に客を呼ぶと云う循環的の事が考えられるが、最初多くの人口を擁するに至り始めた事には更に他の理由が考えられねばなるまい。才一に港町としての発展である。別府の港は古くは浜脇であつたと思われる。今でこそ温泉場としての本場は別府の方に取られた形であるが、古くは寧ろ浜脇の方が本場であつた様で、歓楽境としても浜脇の方が本場であつた事はそんなに古い事ではない。それには温泉と港とのコンビが浜脇の歓楽境としての発達を助けた事が考えられる。之に今一枚加わつて居るのが朝見神社である。即

ち門前町としての浜脇を無視する事は出来ないであろう。

然し別府は単に浜脇の拡大したものであると見るのは正しくあるまい。元来浜脇と別府とは別の存在である。別府は名の示す如く政治的の意義を含むもので、古来豊後に於ける政治の中心であつた大分との關係を考えねばならぬ。即ち大分の政治的勢力、經濟的勢力との關係を無視して別府の發展を考へる事は不可能であろう。而かも此の問題は尚十分に解明せられて居ない様で、確かに別府研究上の好テーマであろう。既に歓楽境として異常の發達を遂げた別府には、其の特性に基づく所の色々の社会問題、或いは風紀問題と云うものが發生して来て居る。例えば最近の暴力事件の如きは其の端的の現われである。之は差当り、政治問題乃至教育行政の問題として取上げらるべき問題であるが、其の対策を樹てるためには其の由来を明かにせねばならず、それは將に地方史家に与えられた好テーマである。

別府のような所は学問の温床としては不適當であるから、別府其のものに生まれた学問はあまり無いかも知れぬ。然し所柄多くの文人墨客が来遊する。其の文人墨客が別府に遺した文芸は相当豊富なのであるまいか。私自身は一向それに

通じて居ないが、探ぐれば相当豊富な成果が得られると思われ。之も別府研究者に取つて好テーマであろう。要するに別府は地方史家に取つて色々の好テーマを擁して居りながらまだあまり研究せられて居ないと云う有様ではないか。大分県地方史の此の特別号が、別府研究の氣運の興るキツカケとなれば幸いである。(元広島文理科大学教授文学博士)